

天文民俗調査報告－2024 年－

北 尾 浩 一 *

概 要

2023 年に続いて、沖縄本島の星名伝承の調査に取り組んだ。2024 年 7 月に 21 年ぶりに沖縄県南風原町の津嘉山大綱曳き(ウーンナ)が実施された。大綱曳きでは、星に関係する歌が伝えられている。星が歌われているのは「一番旗を貫口に立てるとき」「綱を曳き終わったあと」の二つの場面である。歌われる星は、場面によって異なった。

また、2009 年 3 月より 15 年ぶりにアイヌの人びとの暮らしのなかで形成された星名伝承の調査を実施した。調査をもとにプレアデス星団の伝承の共通点、相違点について考える。

1. はじめに

1978 年、新潟県佐渡郡相川町姫津(現 佐渡市)より星名伝承の調査をはじめてから 47 年目になった。調査を実施した地域は、「沖縄県」「北海道」である。

2. 調査の概要

2-1. 調査方法

漁業、農業等に従事した経験を持つ高齢者、経験がなくても年上から伝え聞いていた高齢者を対象にインタビュー調査を行なった。最も高齢の伝承者は昭和 6 年生まれ、最も若い伝承者は昭和 29 年生まれであった。

2-2. 調査地

2024 年は、次の 8 箇所で行った調査を実施した。

- ・1 月…沖縄県島尻郡八重瀬町宜次、小城、富盛、友寄
- ・6 月…沖縄県糸満市糸満
- ・7 月…沖縄県島尻郡南風原町津嘉山
- ・8 月…北海道日高郡新ひだか町静内東別
- ・9 月…沖縄県島尻郡南風原町津嘉山
- ・10 月…北海道日高郡新ひだか町静内東別、沙流郡平取町二風谷

3. 各地域の星名伝承

3-1. 北海道日高郡新ひだか町静内東別

葛野辰次郎氏(1910-2002 年)著『神の語り神互いに話しあう』にて、葛野辰次郎氏のノートが存在しており、星に関する記述があることを知った。葛野辰次郎氏のノートと葛野次雄氏が伝え聞いている星名伝承を調査するために 8 月、10 月に訪問した。

◆仕事歌としての「トイタサフツの歌」

葛野辰次郎氏の昭和 41(1966)年 10 月 6 日のノートに、「といたさをっ、の歌をうたいながら、畑たがやし又供小(北尾注 小供?)にも聞かし働き者は食べうると申しながらとの事です」と記されている。畑を耕しながら歌う仕事歌であった。葛野次雄氏は、トイタサフツの歌を歌ってくださった。

◆トイタサフツは星名

トイタサフツについて、葛野辰次郎氏は、「此のトイタサフツは畑たがやし稔となる間、出ない星です。それでフチ達が(トイタサフツ)と星に名付、其の星シサム方供養星と申す」とノートに記している。「シサム方供養星と申す」は、和人は九曜星と申すという意味である。九曜星は、江戸時代の方言辞書『物類称呼』の「昴」の項に、「東国にて九よりの星と云」と記されており、プレアデス星団を意味する。

◆トイタサフツの歌詞

葛野辰次郎氏の昭和 41(1966)年 10 月 6 日のノートには、次のように記されている。

「といた あんろ といた あんろ
畑 たがやそう 畑 たがやそう

*星の伝承研究室
starlore_kitao@yahoo.co.jp

といた あん やくん、 てっ とい うすね
畑 たがやす なら 手に 土 つくよ
てっ とい うすやくん やしけあんね
手に 土 つくなら あらいましょう
やしけ あん やくん、 もんあんわ、
顔 あらう なら、 流れる わ、
もんあんですよ、 ペっじやうす、 きなあ やいぺかね
流れる なら、 川ぶじの、 草 につかまります
ペっじやうすきな あやいぺかやくん てっ、 つえね
川ぶじの草に つかまるなら 手 切れるよ
てっ つえやくん あんしなわ
手 切れるなら ほうたいする
あんしなやくん たしろ、 こるあんわ、 あたうけね
ほうたいするなら 山刀、 持ちて、 切りますよ」
(北尾注 トイタ: 畑を耕す、 サラツ: 逃げる、 トイタサラ
ツ: 畑を耕すことから逃げる、 川ぶじ: 川淵(かわぶち))

3-2. 沖縄県島尻郡南風原町津嘉山

2024年7月、21 年ぶりに沖縄県南風原町の津嘉
山大綱曳き(ウーンナ)が実施された。綱曳き歌では
次のように星が歌われていた。
「ウグシクヌウナニ グフェロハタタティティ ニヌファブ
シカミティ ウガディシディラ」
「ティンヌムリブシヤ ユミバユマリユイ
ウヤヌユシグトウヤ ユミンナラン」
「ユルハラスフニヤ ニヌファブシミアティ
ワンナチェルウヤヤ ワンドゥミアティ」
「ティンヌムリブシヤ ンナガウィルティユル
クガニミチブシヤ ワウィルティユル」
歌われている星は、次の3つであった。
・ニヌファブシ(子の方星)…北極星
・ムリブシ(群星)…プレアデス星団ではなく空全体の星
・クガニミチブシ(黄金三ツ星)…オリオン座三ツ星

3-3. 沖縄県島尻郡八重瀬町小城

・星名
ムリブシ…ムリブシ、天にちりばめている星。群星(ぐ
んせい)。(注: プレアデス星団ではない)
ティンガーラ…天の川
ニヌハブシ…北極星
綱曳き歌に次のようにニヌファブシが歌われている、
「ユルハラスフニヤ ニヌファブシミアテ
ワンナチェルウヤヤ ワンドミアテ ヤーサッサッサ」
琉歌で「ティンガーラヤ サトメニ シマヨコニナトサ」
と天の川が歌われているが、現在は綱曳き歌で歌わな
い。(話者生年 昭和 26 年)

4. 特筆すべき星名伝承

4-1. トイタサラツの伝承

◆伝承の共通点、相違点

出典	星に関するアイヌの傳説(吉田)	葛野辰次郎氏のノート 1966 年	アイヌの星(末岡外美夫)
話者	膽振有珠アイヌの口誦	葛野辰次郎氏(静内)	宮本ヌマテ姫、栗山国四郎氏(旭川近文)
星名	ユワンノチウ	トイタサラツ	アルワンノチウ、イワンノチウ
助言1	男 トイタアンロー (畑をおこしませうね)	といた あんろ といた あんろ (畑 たがやそう 畑 たがやそう)	一人のまじめな若者 毎日ぶらぶら遊んで いないで、畑でも耕し たらどうだ。いくら化粧 しても、怠け娘は嫁の もらい手がないぞ。
反論1	女 セセキアンワフケ (畑をおこしたら暑いだらうな)	といた あん やくん、 てっ とい う すね(畑 たがやす なら 手に土つくよ)	七人の娘 畠など 耕したら暑く汗は出るし、手 も汚れるよ。
助言2	男 セセキアンコ、シュサンコエン (暑くあつたら水浴びたらえいでせう)	てっ とい うすやくん やしけあんね (手に 土 つくなら あらいましょう)	一人のまじめな若者 汚れたら川で水浴びしたらいい じゃないか。
反論2	女 シュサンコ、モンアムワフケ (水浴びたら流されてひどいだらう)	やしけ あん やくん、 もんあんわ、 (顔 あらう なら、 流れる わ、)	七人の娘 水浴びしたら、流され てひどい目に逢うから嫌だ。
助言3	男 モンアンコ、シュブッキ、シンリチ、アアニ、エアアカブ(流れたら、葦の根、抓んだら、よいでせうよ)	もんあんですよ、 ペっじやうす、きなあ やいぺかね(流れる なら、川ぶじの草 につかまります)	一人のまじめな若者 流されそうになったら、葦の 根につかまれば いいじゃないか。
反論3	女 シブッキ、シンリチ、アアニコ、テッキ、トウエ、ハウケ (葦の根、抓んだら、手を切るだらうさ)	ペっじやうすきな あやいぺかやくん てっ、つえね(川ぶじ の草に つかまるなら 手 切れるよ)	七人の娘 手が切れて、 痛いよ。
助言4	男 テッキ、トウエコ、アシナシナ (手が、切れたら、結んだらえいでせう)	てっ つえやくん あんしなわ(手切れる なら ほうたいする)	一人のまじめな若者 切れたら布で縛って、手 当すればいい。
反論4	女 アシナシナコ、タシラキ、タシラキ、タシラキワフケ(手を結んでも胸が、どきどきして苦しいわ)	あんしなやくん たしろ、こるあんわ、 あたうけね (ほうたいするなら 山刀、持ちて、切りますよ)	七人の娘 傷を縛 っても、胸がどきどき して、せつないよ。あ あ、星になりたいよ。 星なら何もしないで いいだろうからね。

表1 伝承資料の比較

表1の伝承資料を以下、次のように略す。

- ・葛野辰次郎氏のノート 1966 年…葛野ノート
- ・膽振有珠アイヌの口誦 (吉田 1911) …有珠口誦
- ・宮本ヌマテ嬬、栗山国四郎氏 (旭川近文) (末岡 1979) …宮本・栗山

なお、葛野ノートと宮本・栗山の事例では、助言反論の繰り返された結果について、次のように記されている。

- ・葛野ノート…此のトイタサワツは畑たがやし稔となる間、出ない星です。それでフチ達(トイタサワツ)と星に名付、其の星シサム方供養星と申す
- ・宮本・栗山…星になった七人の娘はアルワンノチュと呼ばれ、畑仕事の終わった秋の終り頃から寒い冬空に輝くようになったが、七人の娘のうち一番下の娘は自分の行ないを恥じて、両手で顔を蔽うてしまった。

それぞれの伝承資料の共通点は、次の2点となる。

- ・畑仕事をするように助言している
- ・プレアデス星団として輝くことになる

この共通点は、紙面の関係で掲載できなかった伝承事例においても該当する。(更科源蔵 1970) (吉田巖 1957)

相違点は、次のようになる。

- ・星名は伝承事例によって異なる。数にもとづくもののうち6つの星と認識する事例が、イワンノチュウ、ユワンノチュウ。7つの星と認識する事例がアルワンノチュウ。畑仕事から逃げることにとづくのが、トイタサワツ等。
- ・反論1で、畑仕事をする、葛野ノートでは「手に土つく」、有珠口誦では「暑い」、宮本・栗山では、「汚れると暑い両方」である。
- ・助言3で、つかまれば(抓む、すぎる)よい点は共通。つかまるのは、葛野ノートが「草」、有珠口誦と宮本・栗山が「葦の根」というように異なる。

◆トイタサワツが北斗七星を意味する事例

トイタサワツは、静内ではプレアデス星団を意味する。ところが、平取町二風谷では北斗七星を意味する。

萱野茂氏は、トイタサワツ(toyta-saot)について、「北斗七星」と記している。北斗七星は畑仕事のはじまる時期、即ち5月下旬から6月上旬の日没後は、頭の上に高度を上げている。高度を上げている様子を萱野茂氏は、「畑時季になるとずうっと上へ逃げるのでそう言われるのだ」と記している。畑仕事が嫌で高度を上げて逃げたが故にトイタサワツと呼んだのである。(萱野 2002)

プレアデス星団でなく、北斗七星を意味する伝承事例は、末岡外美夫氏著『人間達(アイヌタリ)のみた星座と伝承』に掲載されている。末岡外美夫氏によると、トイタクル・サワツ・ノチュは、北斗七星のなかで3等星である δ 星を除く六星(α 、 β 、 γ 、 ϵ 、 ζ 、 η)を意味

する。プレアデス星団を意味するトイタサワツとは異なる次のような伝承が伝えられていた。(末岡 2009)

- ・八雲の浜から山に入ったコタンに七人姉妹が住んでいた。母親一人の手で娘たちを育ててきた。
- ・母親は病気に伏して、働き手は七人の娘たちだけになってしまった。しかし、七人の娘たちは家から出て働こうとはしなかった。母親が苦勞して播いた粟や稗はすっかりと枯れてしまった。
- ・その様子を見ていた首長は二人の息子を娘たちのところへ使いにやったが追い返された。首長は、穀物の祭場のカムイに祈りを奉げた。六日の間の祈りが通じたのか、祭場からタンネカムイ(蛇)が出てきた。
- ・その夜、娘たちの住むチセ(家)の戸口からタンネカムイ(蛇)が入ってきた。炉端の周囲をまわるとに大きくなっていくタンネカムイ(蛇)に、娘たちは恐ろしさのあまり外にかけ出した。
- ・大蛇に成長したタンネカムイはりゅう座となり、娘たちは北斗七星となった。おおぐま座 δ 星は、「許して」と顔を隠した末娘で3等星として暗く輝く。アルコルは背負われている母親である。

4-2. 津嘉山大綱曳きで歌われた星

(1) 星が歌われる場面

綱曳き歌は、次の4場面に分かれている。

- ・馬場に登って直ぐ歌う
- ・一番旗を貫口に立てる時に歌う
- ・綱を曳き終わって歌う
- ・式を終り一番旗を持ち帰る時に歌う

星が歌われているのは「一番旗を貫口に立てる時」「綱を曳き終わった後」の二つの場面である。(表2)(表3) なお、綱曳き歌の星名は、「津嘉山大綱曳き調査報告書」(南風原町史編集委員会 1994)「練習の為に作成された冊子」による。以下、次のように略す。

津嘉山大綱曳き調査報告書…調査報告書
練習の為に作成された冊子…練習冊子

	歌われた星	意味する星
調査報告書	北の星(ニシヌフシ)	北極星(こぐま座 α 星)
練習冊子	北の星(ニヌファブシ)	北極星(こぐま座 α 星)

表2 一番旗を貫口に立てる時に歌う星

調査報告書 練習冊子	歌われた星	意味する星
	子の方星(ニヌファブシ)	北極星(こぐま座 α 星)
	群星(ムリブシ)	プレアデス星団[昴]ではなく、全天の星
	黄金三ツ星(クガニミチブシ)	オリオン座三ツ星

表3 綱を曳き終わって歌う星

表2、表3によると、歌われる星の特徴がある。

・歌われる星は、場面によって異なる。一番旗を貫口に立てる時は、北極星のみであるのに対して、綱を曳き終わった後は、北極星、全天の星、オリオン座三つ星である。

・一番旗を貫口に立てる時に歌う星名は、調査報告書、練習冊子と両方とも「北の星」と表記されているが、読み方が異なる。調査報告書ではニシヌフシ、練習冊子はニヌファブシである。2024 年に実施された津嘉山大綱曳きでは、練習冊子にもとづいて歌われた。

・群星(ムリブシ)はプレアデス星団(昴)ではなく、全天の星である。

(2) ニシヌフシかニヌファブシか

練習冊子によると、一番旗を貫口に立てる時の歌においては「北の星」をニヌファブシと歌い、綱を曳き終わって歌う星と同じニヌファブシに統一している。沖縄本島ではニヌファブシという名称のほうが生活のなかで使われており、現時点で北の星(ニシヌフシ)という呼び方を記録できていない。生活のなかでの呼び名であるニヌファブシに統一したのであろう。しかし、調査報告書によると、「一番旗を貫口に立てる時に歌う」場面においては、北の星(ニシヌフシ)と歌われており、昔からの伝承はニシヌフシであり、かつてはニシヌフシと呼んでいた名残である可能性がある。

(3) 一番旗を貫口に立てる時の歌の解釈

首里城の(正面の正殿、南側の南殿、北側の北殿に囲まれた)御庭(うなー)に御拝領旗(旗頭)を立ててと歌っている。(表4) ところが、旗を立てるのは首里城ではなく津嘉山である。「御城の御庭に御拝領旗立てて」という心で、津嘉山で立てていた可能性を考える。津嘉山で立てるときに、目には見えなくても、首里城の御庭が心には広がっていたのかもしれない。

練習冊子	解釈
御城の御庭に (ウグシクヌウナニ)	首里城の(正面の正殿、南側の南殿、北側の北殿に囲まれた)御庭(うなー)に
御拝領旗立てて (グフェロハタタティティ)	(琉球国王、尚敬王から賜った)御拝領旗(旗頭)を立てて
北の星かみて (ニヌファブシカミティ)	にぬふあぶし(北極星)を見て
拝ですでら (ウガディシディラ)	拝んで

表4 一番旗を貫口に立てる時の歌の解釈

(4) 綱を曳き終わってからの歌の解釈

練習用の冊子も、『津嘉山大綱曳き調査報告書

(1992 年)』も星名の呼び方は同じである。綱を曳き終わってからの星を歌った歌について、練習冊子と『標音評釈 琉歌全集』(島袋、翁長 1968)と比較すると、全体的な意味は同じであるが、星名は異なる。(表5)(表6)

練習冊子	標音評釈 琉歌全集	琉歌番号
天の群星や (ティンヌムリブシヤ) よめばよまれゆい (ユミバユマリユイ) 親のよせ言や (ウヤヌユシグトウヤ) よみもならん (ユミンナラン)	天のぼれ星や (ティンヌブリブシヤ) 読めば読まれゆん (ユミバユマリユン) 親の寄せ言や (ウヤヌユシグトウヤ) 読みもならぬ (ユミンナラヌ)	教訓歌 2566 読人しらず
夜走らす舟や (ユルハラスフニヤ) 子の方星めあて (ニヌファブシミアティ) わん生ちえる親や (ワンナチェルウヤヤ) わんどめあて (ワンドウミアティ)	夜はらす船や (ユルハラスフニヤ) 子の方星めあて (ニヌフワフシミアティ) わぬ産ちえる親や (ワンナチェルウヤヤ) わぬどめあて (ワンドウミアティ)	小浜節 1079 作者未記入
天の群星や (ティンヌムリブシヤ) 皆が上ど照ゆる (ンナガウィルティユル) 黄金三ツ星や (クガニミチブシヤ) 吾上ど照ゆる (ワウィルティユル)	天のぼれ星や (ティンヌブリブシヤ) 皆が上ど照ゆる (ンナガウイトウティユル) 黄金三ツ星や (クガニミツィブシヤ) 我上ど照ゆる (ワウホドゥティユル)	亀甲(カミヌク)節 835 読人しらず

表5 練習冊子と『標音評釈 琉歌全集』の比較

練習冊子	標音評釈 琉歌全集	琉歌分類
群星(ムリブシ)	ぼれ星(ブリブシ)	教訓歌
子の方星 (ニヌファブシ)	子の方星 (ニヌフワフシ)	小浜節
群星(ムリブシ) 黄金三ツ星 (クガニミチブシ)	ぼれ星(ブリブシ) 黄金三ツ星 (クガニミツィブシ)	亀甲(カミヌク)節

表6 練習冊子と『標音評釈 琉歌全集』の星名比較

(5) ムリブシの歌われる箇所の解釈

南西諸島にムリブシとブリブシの呼び名は両方とも分布しているので、その点は問題ない。むしろ、注目すべきは、どちらもプレアデス星団を意味していないという点である。

野尻抱影氏著『日本星名辞典』に、「天ヌ群(ブ)リ星(ブシ)や数(ユ)めば数(ユ)まれ(リ)ねい 親の(ウヤヌ)わし言(グドウ)や数(ユ)みも(ン)ならぬ(ン)」の大意として、次のように記されている。

「天のブリブシ(すばる)は、数えれば数えられるが、親の教えは数えることはできない」(野尻 1973)

野尻抱影氏の記述を疑わずに、ブリブシ、ムリブシ等の群れ星のグループはプレアデス星団(すばる)と考え、拙著『日本の星名事典』においても群れ星のグループ＝プレアデス星団と記した。ところが、2019 年から再び沖縄本島を歩き、糸満、久高島のブリブシはプレアデス星団を意味するものの、次のようにプレアデス星団ではなく「空全体の星」を意味する事例を記録した。

- ・那覇市首里鳥堀町…ムリブシ、(空)全体にあれこうして。
- ・読谷村都屋…ムリブシ、星がたくさんある。全体の星。

また、『沖縄伊江島方言辞典』には、ブリブシについて、「群れ星。満天の星群」(生塩 1999)と記されていた。

「天のぼれ星や 読めば読まれゆん 親の寄せ言や 読みもならぬ」について、『標音評釈 琉歌全集』には次のように記されている。

「(評釈)天の群星は、数えれば数えることができる。しかし親の教訓は、非常に多いので、数えることができない。昔の学校教育が、いかにやかましいものであったかを物語る歌である。物事の数の多いのは、浜の真砂にたとえたものだが、天の群星もまた浜の真砂に劣らないほど多いものである。それにもまさるほど寄せ言が多いということは、ありがたい親の心であると同時に、昔の子供がいかに迷惑であったかとも思いやられる。「読む」は数える意で、「わが恋はよむとも尽きじ荒磯海の浜の真砂はよき尽すとも」の和歌があることで、昔は和語も同様であったことがわかる」(島袋、翁長 1968)

また、亀甲節(かみぬくぶし)の「天のぼれ星や皆が上ど照ゆる黄金(こがね)三つ星や我上(わうへ)ど照ゆる」の「ぼれ星」の語意について、「天の一杯にむらっている星」、評釈に「天の群星は、一様に皆の上を照らしているが、黄金三つ星は私の上のみを照らしている」(島袋、翁長 1968)と記されている。もし「ぼれ星」(群星)が、プレアデス星団であれば皆の上を照らすことができず、本事例では明らかに群れ星が空全体の星である。そして、黄金三つ星(オリオン座三つ星)は、「私の上のみを照らしている」ほど小さいのである。

したがって、「綱を曳き終わってからの歌」のなかでムリブシを歌った箇所の解釈は、表7のようになる。

練習冊子	解釈
天の群星や (ティンヌムリブシヤ) よめばよまれゆい(ユミバ ユマリユイ) 親のよせ言や (ウヤヌユシグトゥヤ) よみもならん (ユミンナラン)	天のムリブシ(空全体の星)は、数えれば数えることができる。 親の教訓は、数えることができない。
天の群星や (ティンヌムリブシヤ) 皆が上ど照ゆる (ンナガウィルティユル) 黄金三つ星や (クガニミチブシヤ) 吾上ど照ゆる (ワウィルティユル)	天のムリブシ(空いっぱいに群がっている星)は、皆の上を照らしている。 黄金三つ星(オリオン座三つ星)は、私の上のみを照らしている。

表7 ムリブシを歌った「綱を曳き終わってからの歌」の解釈

(6) ニヌファブシの歌われた箇所の解釈

野尻抱影氏は、『日本星名辞典』にテンサグぬ花のなかの「夜走らす船や子ノ方星見当て 我生ちえる親や我んど目当て」の解釈について、次のように記されている。

「夜走らす船が子ノ星を目当てにするように生みの親を目当てにせよ」(野尻 1973)

しかし、正しくは、「夜走らす船が子ノ星を目当てにするように私を生んだ親は私(子ども)を目当てにせよ」という意味である。

伝承事例は、以下のように全て親が子どもを目当てであり、野尻氏のように子どもが親を目当てにという事例を記録できなかった。

◆アンケート調査

●島尻郡渡名喜村出身の 60 代～80 代(1984 年当時)

「ユルハラスフニヤニイノフワブシミアティ、ワンナチャルウヤヤワンドゥミアティ」(夜航海する船は北極星を目印として北位をとらえ航行するのですが、私を生んで育てた親は私の成長をあてにして頼りとしているのです)

●国頭郡伊江村川平の並里一熊(なみさと いちぐま)氏(1984 年アンケート調査、当時 77 歳)

「フニハラストウチャ ニヌファ星ミーアテ、ワンナチールウーヤヤワンドミアテ」(船走す時(トゥチャ)は北極星目当、私生んだ親は私が目当)

●八重山郡竹富町鳩間島加治工伊佐氏(明治 38 年生まれ)

「ユウルパラス、フニヤ、ニイヌパプシ、ミアテ、バンナセ

ル、ウヤヤ、バンド、ミアテ」(夜はしらす船は、北極星を目標にしてはしらす。私を生んだ親は、私を目当て)
 ●八重山郡与那国町仲嵩博氏(1983 年現在 57 歳)
 「ユルハラスフニヤ、ニヌハフシミアティ、ワンナチャルウヤヤ、バヌドミアティ」

(夜、航海する船は、北極星が目当てである。私を生んだ親は、私を目当てに生きている)

◆現地調査

●島尻郡仲里村儀間(現 久米島町)

「船ハルス人ハニースファブシ目当テ、僕ウンダ親ハ僕ヲ目当テ」(航海する人は子のほうの星、すなわち北極星を目標にして、僕を生んだ親は僕を目当てにする)

●島尻郡栗国村アギ(東)(昭和16年生まれ)

「ユルハラスフニヤニヌアフシミアテ ワンナチャルウヤヤワンドミアテ」(私を生んだ親は私をめあて 親が自分をめあてにたよりにしている)

●糸満市山城(昭和 24 年生まれ)

「ユルハラスフニヤニヌファブシミアテ、ワンナチャルウヤヤワンドミアテ」(自分を生んだ親は自分をめあてにしている)

◆文献

小浜節(くばまぶし、八重山小浜島の歌)に、「夜はしらす船や子の方星めあてわぬ産ちえる親やわぬどめあて」(ユルハラス フニヤ ニヌフワ フシ ミアティ ワンナチェル ウヤヤ ワンドウ ミアティ)とある。評釈を全文引用する。

「(評釈) 夜航海する船は北極星が目標であり、私を生んだ親は私が目当てである。本当は親は子を目当にしてはならない。しかし子は親の世話をするのは当然の義務と思うべきである。何となれば老後の親が自分の力で生きて行けるのは少ない。多くは子のために全力を傾け尽くして何もないからである。この世では余程恵まれている境遇の人でなければ、老後の不安がないという者はない」(島袋、翁長 1968)

したがって、「ニヌファブシの歌われた箇所」の解釈は、表 8 のようになる。

練習冊子	解釈
夜走らす舟や(ユルハラスフニヤ)	夜に航海する船は、
子の方星めあて(ニヌファブシミアティ)	子の方星(北極星)が目標であり、
わん生ちえる親や(ワンナチェルウヤヤ)	私を生んだ親は、
わんどめあて(ワンドウミアティ)	私がめあてである。

表 8 ニヌファブシの歌われた箇所の解釈

(7) 北極星の方向に位置する首里城

首里城は、津嘉山の大綱曳きが行なわれた馬場(現在の津嘉山小学校)の北の方向に位置する。

したがって、「御城の御庭に 御拝領旗立てて 北の星かみて 拝ですでら」と歌い、一番旗を立てるとき、ニシヌフシ(北の星)(北極星、こぐま座 α 星)の見える方向が首里城になる。

津嘉山のウーンナ(大綱曳き)は、昔は夜に行

なっていたので、首里城

の上に北極星が輝くのを見ながら一番旗を立てたであろう。約4キロ先だから、もし首里城に灯りがあれば灯りが見えたであろう。(右上図)

沖縄本島は北極星の高度が約 26 度だから北極星のすぐ下に首里城があるという感じになるだろう。

『津嘉山大綱曳き調査報告書(1992 年)』の鉦鼓隊(ソグたい)についての記述は、北の星即ち首里城の方角が重要な意味を持っていたことを示している。「20 年前(前々回)(北尾注 1972 年)のウーンナの時まで首里グシク(城)に向かって手を合わせ、王様に対してこれから綱を曳きますという報告をする儀礼が鉦鼓隊によっておこなわれたというが、これも御拝領旗を王からいただいたこととの関係で説明されている」(南風原町史編集委員会 1994)

ここで忘れてはならないことは、21 年前まではニヌファブシではなくニシヌフシと歌っていたことである。馬場(ウマイー)(現在の津嘉山小学校)から北極星の方向に首里城があると記したが、北極星は時代をさかのぼると天の北極から離れていく。

北の星が歌われている綱曳歌の歌詞は、組踊の創始者の玉城朝薫(たまぐすくちようくん、1684 年～1734 年)ら首里士族が選んだという伝承がある。(南風原町史編集委員会 1994) 当時は、北極星(こぐま座 α 星)を北の星(ニシヌフシ)と呼んでいた可能性がある。そして、1700 年には、北極星(こぐま座 α 星)は天の北極から約 2.3 度離れている。月のみかけの直径は約 0.5 度であるので、月が4個半ほど入るほど離れている。北の星を見て正確に首里城となったのであろうか。たとえば、1700 年 7 月 27 日の日の入り後 I 時間の北極星は天の北極より約 2 度東に位置する。現在の北は守礼門付近なので約 2 度東のほうが首里城の御庭に近いかどうか、今後の課題としたい。



首里城は、馬場(津嘉山小学校)からほぼ北に相当する

4-3. 沖縄県糸満市糸満で記録したクガニブシ

2021 年 11 月に訪問した話者を再度訪問した。(北尾 2022) 前回に訪問したときに聞くことができなかったクガニブシを記録した。

「聞いたことあるよ。クガニブシ。聞いたことあるけど、星は何をいっているのかわからん。クガニブシって聞いたことあるよ」

話者は、どのような星か記憶をたどることができなかった。

金城善氏は、北斗七星の星名としてクガニブシを記している。(金城善 1974) しかし、話者は、北斗七星をニーブブシと伝えており、北斗七星である可能性は低い。

一方、金城誠氏はオリオン座三つ星の星名として、タテブシ、ミーチブシとともに、クガニミチブシを糸満市糸満で記録しており、「夏の漁の時、この星の出現や高さから夜が明けるまでの時間を判断している。また、この星はま東から出て、ま西に沈むので洋上で方位を知るあて星としても使える。このためか、この星を『重んじられている星だからクガニミチブシとよぶ』との話も今回得た」と記している。(金城誠 1986) 北尾も、アンケート調査で中頭郡読谷村都屋でクガニミツブシを記録した。しかし、話者は、オリオン座三つ星について、ミィチブシと伝えており、アガリミチブシでなく単にミィチブシと確認したこともあった。オリオンをクガニブシと呼ぶ可能性は少ないであろう。さらに金城誠氏によると、北極星の周りの三星をクガニミチブシ(黄金三つ星)と呼ぶ事例があり、今後も伝承事例を探したい。

4-4. 南西諸島の北斗七星

おおぐま座 $\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta \eta$ (北斗七星)の主な星名について考える。

◆構成する星の数7にもとづいた星名

ナナツブシ、ナナツィブシ、ナナチブシ、ナナチブシ、ナナチフシ等、広く分布している。粟国島浜にて、「ナナチブシ、女 4名 男 3名 仲がよかったらしい。ごはんでも7人でわけて」と記録。(話者生年、大正 15 年)

◆星の数7と方角にもとづいた星名

構成する星の数7に方角を加えた星名が形成された。沖縄では、北のことを「ニシ」、西のことは、「ニシ」ではなく「イリ」と言う。島村修氏によると、沖縄県八重山郡竹富町波照間でニシナナツと伝えられていた。

また、与那国町祖納の崎原用能氏より、「ひしゃくの星、ニチナナチ。明治生まれのじいさんが教えてくれた」と聞く。「ニチ」とは北のこと。ニチナナチは「北七つ」という意味である。また、『与那国ことば辞典』に「ニチナナチ 北斗七星」(池間 1998)、『与那国方言大辞典』に「ニチナナチフチ 北斗七星」(野底 2022)とある。

◆柄杓に見立てた星名

柄杓に見立てて、ニブ、ニーウー、フタル等の各地域の名前で呼んだ。

◎ニブ、ニーブ、ニーブブシ

奄美・沖縄で柄杓をニブと呼ぶ。金城誠氏は糸満市宇糸満、うるま市浜比嘉島でニーブブシを記録した。(金城誠 1984)(金城誠 1986) 『糸満市史資料編 12 民俗資料』によると、糸満に「ニーブ(柄杓)」が伝えられている。(糸満市史編集委員会 1991)

2020 年 7 月、うるま市浜比嘉島と島尻郡栗国村を調査。ニーブブシを記録。(友利健氏、福里美奈子氏同行)(北尾 2021)

2021 年 11 月、糸満市糸満を調査。(友利健氏、福里美奈子氏同行) ニーブブシを記録。(北尾 2022)

◎ニーウーフシ

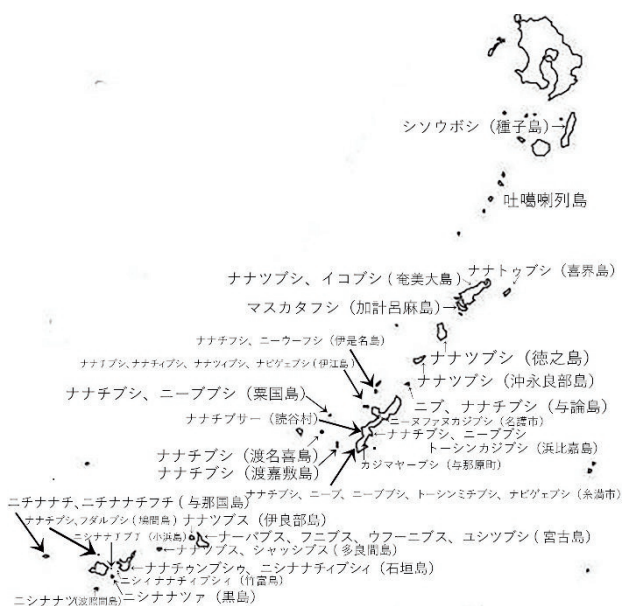
沖縄県島尻郡伊是名村に伝えられている。シサク(柄杓)のことを「ニーウー」と言う。(北尾によるアンケート調査)

◎フダルブシ

フダルとは柄杓のこと。水汲み柄杓に似ている。沖縄県八重山郡竹富町鳩間島に伝えられている。(北尾によるアンケート調査)

◎シャッブス

2022 年 10 月宮古郡多良間村塩川を調査。(友利健氏同行) 柄杓をしゃっしと言い、北斗七星のことを、シャッブスと言った。(北尾 2023)



南西諸島の星名分布図(北斗七星)

◆櫛の形に見立てた星名

◎マスカタフシ(櫛形星)

櫛の形の星に見立てた。櫛の形にみた星名は主にオリオン座三つ星と小三つ星と η 星に形成されるが、北斗七星(おおぐま座 $\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta \eta$)を意味する事例である。2011 年 6 月、鹿児島県大島郡瀬戸内町古仁屋でマスカタフシ(櫛形星)について、「マスカタフシ。米なんか量る柄のついた一升櫛の形。北斗七星。マスカタフシ、北斗七星のこと。マスカタフシ、季節によって

かわる。いまでも見える。マスカタフシ見たことがある。ネノ
ホウフシ、マスカタフシ、『フシ』と言う」と記録。話者の
出身は加計呂麻島。(北尾 2012)

◆船に関する星名

●トーシンミチブシ(唐船道星)

『糸満市史資料編 12 民俗資料』に、「トーシンミ
チブシ(唐船道星)とは北斗七星のことである。ニーブ
(柄杓)、ナナチブシ(七つ星)ともいう」「トーシンミチ
ブシヌ ニヌファブシ クワインリ クガニミチブシヌ チ
ジティクイラン」(北斗七星が北極星を食べようとしてい
る。黄金三つ星が、そうはさせまいと北極星の周囲を
固く守っている)(糸満市史編集委員会 1991)と記されて
いる。福井県坂井郡三国町安島(現 坂井市)に、「と
ろう、とろう、とカチボシ(舵星、北斗七星)まねく。とら
せまいとのヤロウボシ(こぐま座 β γ)」(北尾 2018)と
伝えられていたのと類似している。黄金三つ星は、この
場合はオリオン座三つ星ではなく、こぐま座の δ 星を
含む星列を意味する。

●トーシンカジブシ(唐船舵星)

唐船の舵に見立てた。金城誠氏が、うるま市浜比嘉
島で記録した。(金城誠 1984)

●フニブス(船星)

おおぐま座 γ δ ϵ ζ η を船の形に見立てた。フニは
船、ブスは星を意味する。『宮古方言ノート上』には、
funi-busi と掲載されている。

・funi-busi 船星ノ意。北斗星。(宮古島平良、上地
で記録)(ネフスキー2005)

フニブス(船星)については、次のようにアンケート調
査で記録することができた。

・宮古郡上野村字宮國(現 宮古島市)

フニブス:漁船や航海中、船員たちが見当にすると
云うことから船星と伝えられている。(1983 年記録)

◆その他

●クガニブシ(黄金星)

金城善氏によると、糸満市にクガニブシが伝えられて
いる。(金城善 1974)

5. おわりに

調査にあたっては、北海道日高郡新ひだか町静内
東別の葛野次雄氏、葛野大喜氏、沖縄県島尻郡南
風原町津嘉山の金城清区長、南風原町立南風原文
化センター学芸員前城菜美子氏、そして、友利健氏、
福里美奈子氏にお世話になった。福里美奈子氏は、
与那原の綱曳歌に星が歌われているとご教示いた
だいた。(北尾 2021) 友利健氏の案内で実際に歩いて
みると、津嘉山で21年ぶりに大綱曳きが実施されるこ
とを知った。暮らしのなかで星が語られ、星を歌い、そ
して踊った。星の文化は過去のものではなく、2024 年

になっても実際に行なわれているものであった。

参考文献

- 吉田巖:1911,星に関するアイヌの傳説,人類学雑誌
第二十七卷第七號,東京人類學會,pp.396-401.
吉田巖:1957,愛郷譚叢 アイヌ古事風土記資料 帯
広市社会教育叢書 No.3,帯広市教育委員会,
p.24.
島袋盛敏、翁長俊郎:1968,標音評釈 琉歌全集,武
蔵野書院,p.178. p. 229. p. 546.
更科源蔵:1970,アイヌ民話集(増補改訂版),北書
房,pp.186-187.
野尻抱影:1973,日本星名辞典,東京堂出版,p.179.
金城善:1974,民俗知識,沖縄県文化財調査報告書
糸満の民俗,那覇出版社,pp.69-71.
末岡外美夫:1979,アイヌの星,旭川振興公社,
pp.200-202.
金城誠:1984,浜・比嘉で拾った星の方言名,やちむん
第8号,やちむん会,pp.62-69.
金城誠:1986,星の方言名ー糸満市字糸満一,やちむ
ん第9号,やちむん会,pp.47-53.
糸満市史編集委員会:1991,糸満市史資料編 12 民俗
資料,糸満市役所,pp.373-374.
南風原町史編集委員会:1994,津嘉山大綱曳き調査
報告書(1992 年),南風原町教育委員会,pp.5-6.
pp.75-80.
池間苗:1998,与那国ことば辞典,p.234.
生塩睦子:1999,沖縄伊江島方言辞典,伊江村教育
委員会, p.358.
萱野茂:2002,萱野茂のアイヌ語辞典増補版,三省
堂,p.326.
ニコライ・A.ネフスキー:2005,宮古方言ノート上,平良
市教育委員会,2005,p.184.
末岡外美夫:2009,人間達(アイヌタリ)のみた星座と
伝承,pp.229-232. pp.510-514.
北尾浩一:2012,天文民俗調査報告(2011 年),大阪
市立科学館研究報告第 22 号,pp.37-42.
北尾浩一:2018,日本の星名事典,原書房,
pp.299-300.
北尾浩一:2021,天文民俗調査報告(2020 年),大阪
市立科学館研究報告第 31 号,pp.13-16.
北尾浩一:2022,天文民俗調査報告(2021 年),大阪
市立科学館研究報告第 32 号,pp.15-18.
野底武則:2022,与那国方言大辞典,沖縄殖
産,p.446.
北尾浩一:2023,天文民俗調査報告(2022 年),大阪
市立科学館研究報告第 33 号,pp.27-34.